プレスリリース

2026年11月13日
株式会社 MBS

映像’26「それでも働きたい～障がい者の就労と尊厳～」2026年度 第64回ギャラクシー賞 上期テレビ部門入賞



このたび、放送批評懇談会が日本の放送文化の質的な向上を目的として、優秀な番組・個人・団体を顕彰する「2026年度第64回ギャラクシー賞上期」において、映像’26「それでも働きたい～障がい者の就労と尊厳～」がテレビ部門で「入賞」しましたのでお知らせします。

【テレビ部門 入賞】

・番組名　映像’26「それでも働きたい～障がい者の就労と尊厳～」
・放送日　2026年5月31日(日)
・スタッフ　プロデューサー　和田 浩(報道情報局番組センター)
　ディレクター　樋江井 亮(報道情報局番組センター)

・内容

「それでも働きたい～障がい者の就労と尊厳～」

「おはようございます」と職場で笑い合い、誰かの役に立つ。そんな当たり前の明日を夢見て、彼女は40件もの不採用通知を受け取ってきた。
滋賀県大津市に暮らす深田澪音さん、22歳。脳性まひによる重度障がいを抱えながらも、幼い頃から地域の合唱団へ参加。高校では生徒会活動に打ち込み、自ら障がいについての啓発イベントも企画した。その後短期大学へ進むなど、自ら社会 参加の道を切り開いてきた。

しかし、前向きに就職活動に挑む彼女の前に、冷たい「制度の壁」が立ちはだかる。日常生活の介助は月数万円で済むのに、職場でヘルパーを頼むと原則助成対象外となり、月30万～40万円もの負担がのしかかるのだ。それはまるで、国から「外に出ず、家の中にいなさい」と告げられているかのような理不尽なルールだった。ヨーロッパでは職場でのヘルパー利用を「権利」として、公的な支援制度を整えている国もあるなか、日本は2022年に国連から「職場でヘルパーを利用できるようにするべきだ」と勧告を受けた 。しかし、今のところ状況は変わらないままだ。

なぜ、日本では尊厳を持って「働く」という当たり前の願いがこれほど遠いのか。ひとりの女性の静かな挑戦と就労への道のりを通して、誰もが共に生きられる社会のあり方を考える。

【受賞コメント】

・プロデューサー 和田 浩

障がいがある前に、ひとりの人間として『働く生きがい』を求めるのはごく自然な願いです。だからこそ、理不尽な壁に尻込みせず、自らそれを切り崩そうとする人を『自分には関係ない』と関心の外に置いてしまうのは違う。なぜなら、私たちの無関心こそが、彼女の前に立ちはだかる壁をさらに高く、分厚くしてしまうからです。

今後も、社会の死角に取り残され、かき消されがちな声に寄り添い、真実を伝えるドキュメンタリー制作に努めてまいります。

・ディレクター 樋江井 亮

就労におけるヘルパー利用の課題は、単に重度障がい者が働ける環境が整っているか否かの議論にとどまらず、一人ひとりの「生存権」に関わる問題だと社会全体で受け止められる日が来ることを願っています。

同じ境遇にある誰かのためになればと、勇気をもって取材に応じてくださった深田澪音さんとご家族に、改めて深く感謝申し上げます。

以上

本件問い合わせ先：コンプライアンス局広報部